

道徳的価値の自覚を深める「考え、議論する」授業づくり ～単元型学習としての教材パッケージ化とOPPAの活用を通して～

南風原町立南風原中学校教諭 大城真紀子

I テーマ設定の理由

昨今、新型コロナウイルス感染拡大を契機に、社会構造は劇的に変化し、価値観が多様化、複雑化、流動化している。絶え間なく変化していく予測困難な時代の中で、学校教育には、目の前の事象から解決すべき課題を見つけ出し、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解・最適解を生み出すことなどが一層強く求められている。平成29年告示『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（以下『解説道徳編』と表す）においても、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」の重要性が述べられている。

これまで、発問構成の工夫や問い返しによる「考え、議論する」授業づくりを目指して実践を積み重ねてきた。生徒は、発問によって価値を理解し、議論によって多様な考え方に触れ、問い返しでは人間理解に迫り、自分との関わりでもう一度価値を再構成する体験を積み重ねている。一方で、1時間の授業の中で、価値を再構成しながら現時点での納得解を生み出すと同時に、自己内対話も完結するため、そこからさらに高次の価値理解を深めるような継続した学びを維持することができなかった。このような課題から、生徒が道徳科の授業での学びを継続的に考えることができる授業づくりが必要だと考えた。

そこで、本研究では1時間の授業での学びを継続的に問い続けられる工夫として、単元を貫く道徳的課題を本質的な問いとした、主題横断型の複数教材をパッケージ化する。これまでと同様に1時間ごとの授業では「考え、議論する」活動を目指しつつ、本質的な問いを横断的に考えさせたい。その際、OPPA（1枚ポートフォリオ評価）を活用することにより、道徳科の授業での学びを1時間で完結させることなく、他の主題との関連で考えるなど、継続的な学びへと促したい。また、問いに対するプレ・ポスト記述と毎時間のリフレクション等の工夫により、生徒は自己の変容や成長をメタ認知でき、自己理解が更に深まるのではないかと考えられる。このような活動により、生徒はより道徳的価値の自覚を深めることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

道徳科の授業において、以下に示す2点の工夫に基づく「考え、議論する」授業を行うことで、継続的な学びが促され、道徳的価値の自覚をより深めることができるであろう。

- 1 道徳的課題を本質的な問いとする単元型学習としての教材パッケージ化
- 2 OPPA（1枚ポートフォリオ評価）を活用したリフレクションの工夫

III 研究内容

1 道徳的価値の自覚を深める「考え、議論する」授業とは

(1) 道徳科の授業に求められること

『解説道徳編』では、道徳科の目標を表1のように示し、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものである。」と解

説している。これは、道徳の教科化に伴って掲げられた「考え、議論する道徳への質的転換」を意図しており、「主体的・対話的で深い学び」のある授業を目指すことにも繋がっている。

島（2020）は道徳性について考えた氷山モデル（図1）の第3層（道徳的価値レベル）を子どもの言葉で想定し、その内容について話し合う授業に近づくことが「深い学びの鍵」だと述べている。

このことを踏まえ、本研究では、道徳的諸価値の理解を基に、自己のこれまでのものの見方・考え方について振り返り、他者と議論したり、意見を交流することで、多面的・多角的な考え方に触れさせる授業を目指したい。そうすることで、生徒はこれまでの自分の考え方について吟味し、多様な考え方に触れることで新たな価値を再構成していくことができると考える。このような「考え、議論する」授業の実現が、道徳的価値の自覚に繋がるものと考えられる。

(2) 内容項目と道徳的価値

道徳的価値とは、人間としてのよさを表すものである。『解説道徳編』第3章の「第2内容」（以下「内容項目」と表す）と同義のものとして捉えられていることが多いが、内容項目に複数の道徳的価値が含まれていると説明することができる。

『解説道徳編』には、内容の捉え方として「内容項目は、生徒自らが道徳性を養うための手掛かりとなるものである。」と示されている。また、各内容項目を生徒の実態を基に把握し直し、指導上の課題を具体的に捉え、生徒自身が道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深めることができるよう、実態に応じた指導を行うことが道徳的価値の自覚を深める指導だと述べている。

(3) 道徳的価値の自覚を深めるとは

上地（2020）は、「道徳科における学習とは、道徳的に正しいことを伝達されることではなく、正しいとされることのその『正しさ』を多面的・多角的に、そして批判的に考察し、その正しさを確認したり、修正すること」としている。ここで言う「正しさ」とは価値に対する個人の見解だと考える。実生活の場面で価値が構成されると、それは、前理解として道徳的判断の選択肢が広がることに繋がっている。図2で示すように、前理解に基づいて行う「考え、議論する」道徳科の授業で、多面的・多角的に考察されたものを再び自分との関わりで考え、新たな価値を再構成する過程を繰り返すことで、道徳的価値の自覚は深まっていくと考える。

そこで、本研究では「考え、議論する」道徳科の授業を土台として、複数の教材をパッケージ化する。学びを繋げ、汎用的に活用することで、新たな知見の広がりや高次の価値理解に迫り、何度も吟味と再構成を繰り返すことで、道徳的価値の自覚をより深めることができると考える。

2 単元型学習としての教材パッケージ化とOPPAについて

(1) 単元型学習としての教材パッケージ化

単元型学習としての教材パッケージ化とは、単元を貫く問いを設定し、関連する複数教材を主題横断的に学習しながら現時点での納得解や最適解を考えていく学習である（図3）。単元型学習にすることで、道徳的な学びを連続させ、多様な道徳的価値を内包した現実的・日常的な道徳的課題と

表1 道徳科の目標（『解説道徳編』より）

（「第3章 特別の教科 道徳」の「第1 目標」）

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

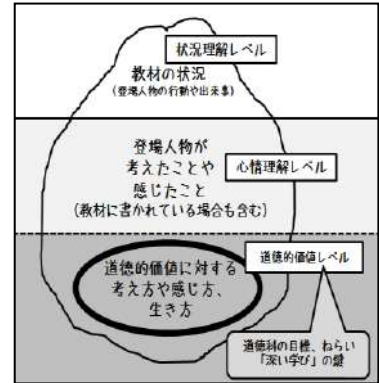


図1 氷山モデル（島 2020）



図2 価値の再構成イメージ

向き合える「生きて働く力」としての道徳的資質・能力の育成にも結びついている。それは、道徳的価値理解・価値自覚という道徳科学習のプロセスを経る中で、生涯にわたって機能する汎用的スキル形成にも繋がると考える。

また、教材パッケージ化を導入するにあたり、画一的な教材のパッケージ化は求めない。生徒の実態に沿って、適宜導入し、重点的な授業展開を行うことで、実効性が高まるものとする。

(2) 道徳科における指導と評価の一体化

『解説道徳編』には評価について「生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする」と記載されている。つまり、道徳科における評価においても、指導に生かされ、生徒の成長に繋がる評価でなければならないと考える。

また、道徳科はよりよく生きるための基盤となる道徳性を育てることをねらいとしている。そのため教師が授業を行う上で、道徳的価値に関わる道徳性の諸様相を育てるために授業を工夫しながら主体的・対話的で深い学びを構想し、その工夫により表出した生徒の学びの姿を継続的に把握し、評価することが道徳科における指導と評価の一体化であるとする。

これを踏まえ、生徒のエピソードを蓄積したポートフォリオによる評価が有効であると考えた。

(3) OPPIA 論とは

本研究においては、ポートフォリオ評価の中でも、生徒の学びを継続的に、より明確に把握するための手立てとして、堀（2019）が提唱する OPPIA（1枚ポートフォリオ評価：One Page Portfolio Assessment）論に基づく評価方法を取り入れる。OPPIA とは、教師のねらいとする授業の成果を、学習者が1枚の用紙（OPPシート）の中に単元学習前・中・後の履歴として記録し、その全体を学習者自身が自己評価することである。

OPPIA の実践においては、教師が OPP シートを作成する。学習者の学習履歴に対して教師がコメントを書き、学習の質を高めるとともに、授業改善を行うこともできる構造になっている。また、学習者においては、毎時間のリフレクションだけでなく、単元学習の最後に全体を振り返って自己評価を行うことで、自己の学びを実感できるため、指導と評価の一体化に繋がるものとする（図4）。

このような自己評価はメタ認知と深く関わっている。なぜなら自己評価には、自己の学習状況を適切に把握し、修正するというモニタリングが求められるからである。自己評価は、自己を改善するために調整するという機能をもっている。OPPシートでは、「単元を貫く問い（プレ・ポスト）」「学習履歴」「単元学習後の自己評価」の3種類の自己評価が行われることから、メタ認知の育成に重要な役割を果たしている。また、OPPシートは学習履歴として、それまでに記述された内容全体を見ることができ、前の時間に書いたことを見て、次の時間に行うことを見通すことが可能になる。つまり、OPPシートの記述が学びの途中であっても次第に単元全体の構造を予想したり、学習者が自己評価の過程の中で、改善するための調整を自然に行うことができる構造になっている。

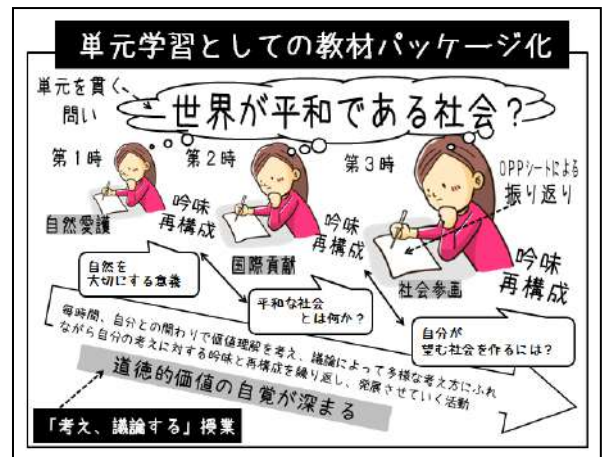


図3 教材パッケージ化イメージ

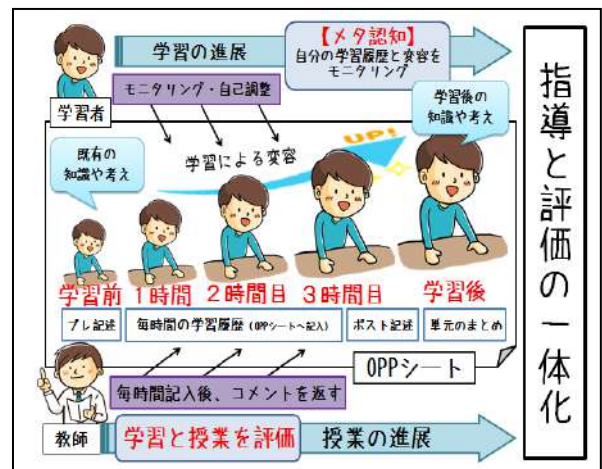


図4 OPPシートの基本的構図

これらを踏まえ、単元型学習における教材パッケージ化の道徳科の授業を行う際、OPPA 論に基づく評価方法を取り入れることで、生徒のメタ認知を促し、価値理解の自覚をさらに深めることに繋がることを考える。

IV 検証授業

1 単元名 「世界の平和について考えよう」

2 教材名 「木の声を聞く」「花火に込めた平和への願い」「富士山から変えていく」

(日本文教出版『あすを生きる1』より)

3 単元設定の理由

私たちは、地球規模の相互依存関係の中で生きている。また、今日私たちが抱える問題、例えば、環境、資源、食料や健康、危機管理などは、どれも1地域や1国内にとどまる問題ではない。これからの未来を担う子ども達は、日本のことだけを考えるのではなく、国際的視野に立ち、広く世界情勢に目を向けつつ、日本人としての自覚をもって国際理解に努めることが必要である。その際、持続可能な社会の形成という視点を持つとともに、広く地球規模で物事を考えていくことが重要である。そこで本単元では、国際理解・国際貢献、自然愛護、社会参画・公共の精神の3つの内容項目を含む教材をパッケージ化する。「世界平和」について複数の道徳的価値を横断的に考えることができる問いを立てることで、道徳的諸価値との関連を図りながら考えを統合していく活動ができる。学びの連続性、継続性を意識することで、道徳的価値の自覚をさらに深めることができる単元となっている。

4 単元構想

単元名：「世界の平和について考えよう！」(全3時間)			
単元のねらい：自然愛護に努めるとともに、日常生活の中で社会連帯の自覚に基づく、あらゆる時と場所における協働の場を実現していく努力と国際的視野に立って、よりよい社会を実現していこうとする実践意欲を育てる。			
時間	第1時	第2時	第3時
教材名	あすを生きる1 (日本文教出版) 「木の声を聞く」	あすを生きる1 (日本文教出版) 「花火に込めた平和への願い」	あすを生きる1 (日本文教出版) 「富士山から変えていく」
主題名 (内容項目)	自然を愛する (D 自然愛護)	世界平和のために (C 国際理解、国際貢献)	つながりが生み出す力 (C 社会参画、公共の精神)
ねらい	自然環境を大切にすることの意義を理解し、自然に謙虚に向き合いながら自然愛護に努めようとする態度を育てる。	互いの文化や価値観を尊重するとともに、国際的視野に立って、世界の平和に貢献しようとする態度を育てる。	共同生活を営む人々の集団である社会の一員として、自分も他人も共に手を携え、協力し、誰もが安心して生活できる社会をつくっていこうとする態度を育てる。
ねらいとする道徳的価値	絶え間ない技術革新によって、急進的に社会構造が変化していく現代社会の中で、環境問題は、地球規模で解決しなければならない大きな課題を多数抱えている。2015年に国連で採択されたSDGsが提唱されてから既に5年が経過したが、どの国も具体的な方策を示すことができていない。そんな中で「自然環境を大切にすることの意義を理解すること」は、自然の中で生かされている人間が、自然に対して謙虚に向き合うことの大切さを理解することにほかならない。その理解が、人間として生きることの素晴らしさの自覚に繋がり、自然を大切にすることの意義を実感することができる。本教材では、自然の大きな営みの中で生かされている人間が、自分もまた自然の一部であるという謙虚な気持ちで、自然と向き合っていくことの大切さに気付かせたい。	情報社会に続く新たな社会として、Society5.0が未来社会の姿として提唱され、今後は更にグローバル化が進み、異なる文化や価値観を背景とする人々との相互尊重がより重要な時代となってくる。また私達は地球規模の相互依存関係の中で生きており、我が国が国際的な関わりを持つことなく孤立して存在することはできない。多様な文化や価値観を持つ人々を尊重し、理解しようとする姿勢が大切である。また、平和は、全ての国々の万人の心の中で模索すべき道徳的課題の1つであるということを理解し、日常生活の中で社会連帯の自覚に基づき、あらゆる時と場所において協働の場を実現していく努力が必要である。本教材では、前時の「自然愛護」との関連を含めて、人間だけでなく、地球規模で考える平和に気付かせたい。前時と本時の統合から、次時のよりよい社会の形成者としての自覚に至る流れを作り、学びの繋がりを実感させたい。	新型コロナウイルス感染拡大に伴い、ソーシャルディスタンスを意識した新しい生活様式の導入によって、人間関係が希薄化しつつある。予測困難なこれからの未来に対する不安感もあり、他者に対する配慮を欠き、公の場で自己中心的な言動をとりしてしまう生徒も少なくない。一方で、自己中心的で自分勝手な言動をよくないと思う心が内面にも十分備わっており、誰もが望むよりよい社会の実現については、大人より純粋に考えることもできる。だからこそ、どのように社会に参画し、どのように連帯すべきかについては、多面的・多角的に考えを深めるよう指導することが大切である。誰もが安心・安全によりよく生活するためには、社会の形成を人任せにするのではなく、主体的に参画し、社会的な役割と責任を果たすことが大事になる。そこで、本教材では、これまで行った「自然愛護」「国際理解・国際貢献」の学びとの関連を統合しながら、よりよい社会の実現について社会形成者の一員であることを自覚し、積極的に参画していこうとする意欲を高めたい。
	生徒はこれまで、自然の素晴らしさや不思議さ、偉大さを知り、自然環境を大切にすることについて学んできている。また、	生徒はこれまで、他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚を持って国際親善に努めることについて学習してきた。中学校では、英	生徒はこれまで、社会に奉仕することの意義を理解し、公共のために役立つことをしようという意欲や態度を持つよう指導されている。一方で、自分勝手な言

生徒観	SDGs について各教科で触れており、自然や環境に対する関心は高まっている。しかしながら、地球規模での問題を自分事として捉えるには大きく、一部に実感を伴わない生徒もいる。自然を大切にすることを考える理由について考え、人間も自然の一部であり、自然の中で生かされている存在であることに気付かせることで、有限な人間の力を超えたものを謙虚に受け止め、自然を愛護しようとする心を育てたい。	語や社会など他教科等の学習も相まって、世界の様々な国に対して興味・関心が一層高まっていく時期である。本教材では、国際社会において、他国の文化を尊重し、理解し合うことで、平和を目指していくこととする視点とともに、前時で行った「自然愛護」との関連を踏まえて、自然を大切にすることも平和に繋がっていることに気付かせたい。そして、自国のことだけでなく、地球規模の課題に対しても、あらゆる時と場所において協働の場を実現していくこととする実践意欲を育てたい。	動や、他者に対する配慮を欠くこともしばしば見られる。よりよい社会を実現するためには、社会生活において互いに迷惑をかけることのないような行動の仕方を身に付けるとともに、進んで社会と関わり、積極的な生き方を模索しようとする態度を育てることが必要である。これまで学んだ「自然愛護」「国際理解・国際貢献」で考えた納得解・最適解を基に、よりよい社会とはどのような社会かを考え、自分自身も社会の形成者であるという自覚を持って、その実現に向けた具体的な実践意欲を高めたい。
教材観	木の声を聞くことを通して、木が持つ力を確信した樹木医である塚本こなみさんの樹木に寄せる思いを中心に、自然の生命の尊重について綴られている。樹齢150年ほどの大藤の生命力を確信し、移植に取り組む塚本さんの考えに触れ、自然と人間の共生について考えさせたい。自然を外から制御する者となって保護するという自然への対し方ではなく、一人一人が自然との繋がりを思い出し、同行する者として生きようとする意欲を高めることができる教材である。	主人公のゆかりは、長岡市とホノルルの訪問事業の一員である。訪問の際、ホノルルの人たちの温かさやアリゾナ記念館のガイドの穏やかな口調やまなざしにふれた。両国の悲しい過去を踏まえた上で、ガイドの「未来を見つめて、日本ともしっかり関係を作っていききたい。」という言葉から、1人の人間としての接し方も学んだ。このような背景の下、長岡の花火には、慰霊と平和の願いが込められていることを知ったゆかりは、花火を見ながら「平和のために」貢献することを自問するという教材である。	登山家である筆者・野口健さんがエベレスト登山をきっかけに環境問題を意識し、富士山の環境保全活動を通して感じたことが綴られている。日本一の富士山には毎年多くの人が訪れる。しかし、一部の人の自分勝手な行動が悲惨な環境破壊を招いていた。その現実の中で、野口さんは環境美化への使命感を持ち、連帯意識を持って清掃活動を実施した。その結果、多くの人が富士山の環境を意識し、行動するようになった。それに伴って富士山の環境がよくなっていった。この実話から「意識して、行動すること」が何かを変える大きな力になることを伝える教材である。

5 単元目標と検証の視点

(1) 単元の目標と身に付けさせたい力

単元の目標
「平和」についての見方・考え方を広げ、社会形成者としての自覚を高める。
身に付けさせたい力
多様な考え方に触れ、自分のものの見方・考え方に対する吟味を行い、価値を再構成する活動を繰り返すことで、常によりよく生きるための納得解・最適解を考え続ける姿勢。

(2) 単元を通して期待される生徒の姿

1時間完結授業で得られた納得解・最適解を既存の価値理解として、他の価値との関連を図りながら常に納得解・最適解を更新し、よりよい生き方について考えを深めようとしている。

(3) 検証の視点

視点①計画的・意図的発問や問い返しによる「考え、議論する」授業の工夫

状況理解、心情理解を踏まえ、道徳的価値についての個々の見方・考え方・感じ方をクラス全体に広げていくことで、前理解に対する吟味を行い、価値の再構成を図っているか。

視点②生徒が自ら考えの変容を実感することができる OPP シートの工夫

前時との関連に触れながら、価値を再構成する記述や考えの変容がわかる記述があるか。

6 単元の指導計画と学習指導案（全3時間）

(1) 単元の指導計画

時	○生徒の活動（言語活動、学習内容等） ■発問	□評価基準 ◆検証の視点
	・世界が平和である社会とはどのような社会か。（プレ記述）	※学習前にプレ記述させる。
1	あすを生きる1『木の声を聞く』（日本文教出版） ○画像を見て、人が美しい「自然の美」に心惹かれる理由を考える。 ○本文を読み、内容を整理する。 ■自然と人間が共生するためにできることは何か？ ○自然に対してこれからどのように向き合っていくか考える。	□人間も自然の一部であること、自然の恩恵で生きていることを理解し、共生するためにできることを考えている。 （様相、ノート、発言、OPPシート） ◆自分事として捉えている。
2	あすを生きる1『花火に込めた平和への願い』（日本文教出版） ○花火の動画や写真を見ながら、平和とは何かを考える。 ○本文を読み、内容を整理する。 ■「世界平和のためにできることは何か、考えよう」 ○「平和」とは何かを考える。 （前時の「自然愛護」との関連を踏まえる）	□戦争や紛争のない社会が平和ということではなく、誰もが安全に安心して暮らせる社会が平和であることを理解し、自分ができることは何かを考えている。 （様相、ノート、発言、OPPシート） ◆前時の自然について考えたこととの関連で考えている。

3	<p>あすを生きる1『富士山から変えていく』(日本文教出版)</p> <p>○10年後になくなってほしいもの(こと)を書く。</p> <p>○富士山のイメージをつかむ。</p> <p>○全文を読み、内容を整理する。</p> <p>■野口さんは「意識をもち、行動に移すこと」がなぜ大切だと考えているのだろう。</p> <p>○よりよい社会をつかっていくために、自分ができることは何か考える。</p>	<p>□よりよい社会を実現するために1人1人の意識が大切であることを理解し、行動しようとする意識を持っている。</p> <p>(様相、ノート、発言、OPPシート)</p> <p>◆前時までの自然愛護、世界平和との関連を踏まえて、よりよい社会の実現に向けた行動意欲を高めている。</p>
	・世界が平和である社会とはどのような社会か。(ポスト記述)	※学習直後に記入させる。

※OPPシートによる毎時間の振り返りは、指導の改善や生徒の学習改善にいかすものとする。

(2) 指導案 I (第1時/全3時間)

- ① 主題名 自然を愛する (D 自然愛護)
- ② 教材名 「木の声を聞く」 出典(日本文教出版『あすを生きる1』より)
- ③ 学習指導過程

段階	【学習活動】 (内容・発問)	○生徒の反応 ※指導上の留意点・発問の意図	検証の視点
導入 5分	<p>1 自然美を感じる写真を見る。</p> <p>■なぜ人は、自然の美しさに心惹かれるのだろうか?</p> <p>■このような景色が環境問題によって見られなくなることに対してどう考えるか?</p>	<p>※画像を見せることで自然の神秘さを想起させる。</p> <p>○普段見れないから。</p> <p>○人間が作るができないから。</p> <p>○みんなで、自然を守りたい!</p> <p>※現時点での自然との向き合い方を自覚させる。</p>	 <p>あしががフラワーパークの大満</p>
展開 35分	<p>2 教材を読み、内容を整理する。 【前段】(15分)</p> <p>■教材を読む。</p> <p>《補助発問で内容を整理》</p> <p>①塚本さんは樹木医をどのような仕事として捉えているか?</p> <p>②塚本さんは、自然とどう向き合っているか?</p> <p>3 考え、議論する。 【後段】(20分)</p> <p>【中心発問】</p> <p>人と自然が共生していくために大切なことはなんだろうか?</p> <p>【問い返し】(議論)</p> <p>なぜ自然を大切にしなければならぬのか?</p>	<p>教師による音読で、集中して聞く生徒。</p> <p>(板書で整理する)</p> <p>※塚本さんが、他の樹木医とは異なる自然に対する接し方をしていることに触れ、自然との向き合い方を捉えさせる。</p> <p>○「自然を守る」は人間中心に考えてる。</p> <p>この発言により、「人間も自然の一部なのに、この言葉はおかしい」という問いが生まれる。</p> <p>○人間が自然に対して、心がけることがある。</p> <p>生徒の発言</p> <p>(個人で3分考え、全体で共有)</p> <p>※生徒の発言を受けて、「共生」について考えさせる。</p> <p>○自分たちは、木や川などに生かされていることを自覚すること。</p> <p>○1人1人が自然に興味を持つことで、自然の美しさに気づくことができる。(自然を大切にしようと思える)</p> <p>※自然に生かされてる人間という自覚を議論の中で再認識する。</p> <p>(中心発問で納得解に至らなかった生徒への手立て)</p>	<p>視点①</p> <p>状況理解</p> <p>教材の内容をしっかりと把握させる。</p> <p>心情理解</p> <p>塚本さんの自然との向き合い方を捉える。</p> <p>導入時の自分達の意見に対する吟味が行われる。</p> <p>道徳的価値</p> <p>自然の中に生かされている人間に気づき、自ら自然を愛護しようという意欲を高める。</p> <p>自然の中に生かされている人間の具体について話し合う。(自分の言葉で)</p>
終末 10分	<p>4 振り返り</p> <p>自然とどう向き合って生きていくべきか。</p> <p>■OPPシートに記入</p>	<p>【振り返り】</p> <p>私達は自然を守ると言っているけれども、私達は自然を生きるために利用しているのではないかと思っています。なので私は、自然を大切に生かされていることに感謝したいと思いました。</p>	<p>視点②</p> <p>考えの変容についての記述があるか。</p> <p>前理解の吟味を行い、価値を再構成している様子が窺える。</p>

④ 板書

1/6(水)第28回 道徳(自然を愛する)

④ P.16 「木の声を聞く」

なぜ人は、自然の美しさに心惹かれるのか?

・普段見れないから

・人間が作るできないから。

人間も自然に生かされていることに気づくことができる。

1人1人が自然に興味を持つことで、自然の美しさに気づくことができる。

自然と人間が共生するために出来ることは何か?

・人間も自然になる。(自分だけ木や川などに生かされていることを自覚)


・人間が自然に生かされているように、自然を人間が生かす。

・1人1人が自然に興味を持つことで、自然の美しさに気づくことができる。

内容整理をしている段階で、生徒から「自然を守ろう」が人間中心の考えであることへの気づき、疑問が生まれる。また、導入時の自分達の考え方(みんなで地球を守る)に対する吟味が行われた。

(3) 指導案Ⅱ (第2時/全3時間)

- ① 主題名 世界平和のために (C 国際理解・国際貢献)
- ② 教材名 「花火に込めた平和への願い」 出典 (日本文教出版『あすを生きる1』より)
- ③ 学習指導過程

段階	【学習活動】 (内容・発問)	○生徒の反応 ※指導上の留意点・発問の意図	検証の視点
導入 5分	1 花火の動画を見る。(約3分) ■「平和」とは何か?	※長岡市の花火大会に関する動画を見て、歴史的背景を確認する。(長岡空襲、真珠湾攻撃) ○争いが無い。 ○差別が無い。 ※プレ記述で書いた「平和」に対するイメージを想起させ、前理解を確認する。	 長岡花火の歴史動画
展開 35分	2 教材を読み、内容を整理する。 【前段】(15分) ■教材を読む。 《補助発問で内容を整理》 ①アリゾナ記念館がある理由はなんだろう? ②どんな気持ちでゆかりはホノルルに着いたのか? ③ゆかりの心がどのように変化したか? ④「日本ともっと良い関係をつくりたい」あるが、どのような関係かだろう?	(板書で整理する) ※長岡市とホノルル市の間にある歴史的に悲しい繋がりを踏まえ、現在に至る交流事業に関する流れを確認。アリゾナの人がどのような関係を築いていこうとしているのか、捉えさせる。 もっと良い関係とは? ○仲良し。 ○認め合う。 ○受け入れる。 ※戦争をしない、仲良くするという表面的な関係ではなく、互いの文化や考え方を尊重していこうとする異文化理解について捉えさせたい。	視点① 状況理解 教材の内容をしっかりと把握させる。 状況理解がしっかりとできないまま進んでいた。 心情理解 ゆかりの心情を捉えさせる。
	3 考え、議論する。 【後段】(20分) 中心発問 世界平和のために自分にできることは何か? 問い返し(議論) ①人間の問題だけを解決すれば「平和」な社会になるのか? ②戦争で犠牲になったものは人間だけなのか? ③戦争や争いごとがなければ「平和」になるのか?	(個人で3分考え、全体で共有) ※平和のために互いの理解が必要だという視点から、自分のできることを考えさせる。 ○異なる意見でも受け入れる(認め合う) ○平和を願う心が一致するために話し合う。 ○過去から学ぶこと。 ①「自分だけがいいって考えはだめ」 ②「自然も含めて?考える」 ③「今は、平和と言える。本当はもっと(環境とか)考えないといけないかもしれないけど、人が死んでないし、妥協して、自分は今は平和と思っている」 →納得解ではないが、(現時点での)最適解として平和を捉えている。	道徳的価値 他国の文化や伝統を尊重し、異文化を理解への意欲を高める。 ②の発言のあと、別の生徒が「前の時間に引っ張られすぎ」とコメントしたことで、学びの関連性が途切れる。 自然愛護との関連から、地球規模で平和を考えようとする視点も大切にする。 ★パッケージ化による学びの繋がりを意識させる。
終末 10分	4 振り返り 「平和」とは何か? ■OPPシートに記入 前時の「自然愛護」との関連を踏まえ、「平和」を人間だけでなく、自然や生き物も含めて考え、価値の再構成を図っている。	○平和になるためには、必ず犠牲(人や自然)があるということ。でも、何かできることはあると思う。(犠牲を出さずに平和になるための何か)	視点② 前時との関連で「平和」についての再構成しているか。

④ 板書

(4) 指導案Ⅲ (第3時/全3時間) ※本検証

- ① 主題名 つながりが生み出す力 (C 社会参画、公共の精神)
- ② 教材名 「富士山から変えていく」 出典 (日本文教出版『あすを生きる1』より)
- ③ 学習指導過程

段階	【学習活動】 (内容・発問)	○生徒の反応 指導上の留意点・発問の意図	検証の視点
導入 5分	1 10年後になくなって欲しいものはなんだろう？ ■この中から10年後、完全に世の中になくせると思うのはどれ？	○争い、戦争、格差 ○偏見、差別 ○コロナ、ブラック企業 →全部無理。 (そう思う理由を具体的に聞く。)	 意見を出し合う生徒
展開 35分	2 教材を読み、内容を整理する。【前段】(15分) ■富士山について知っていることを挙げてみよう。 ■教材を読む。 《補助発問で内容を整理》 ①野口さんが富士山のことを知るきっかけになった出来事は？ ②富士山の五合目にゴミがなくなったのはなぜか？ ③富士山にゴミがあったらなぜだめなのか？	※富士山のイメージを捉えさせることで、本文にある富士山の現状について、問題意識を持たせる。 ○大きい、日本の象徴 ○きれい、寒い、高い (板書で整理する) ※野口さんが、富士山のゴミ拾いをはじめたきっかけを捉えさせる。 ※多くの人が意識し、行動することで、環境や状況を変えることができることに気付かせたい。 ※日本人のマナーの問題やゴミが、富士山の水に吸収され、人体に害を与えるかもしれないことを捉えさせる。→環境問題への意識化	「富士山」に対する生徒の前置理解の不足から、教材の状況理解、心情把握まで、生徒の思考が環境問題と上手く結びつかなかった。 視点① 状況理解 教材の内容をしっかりと把握させる。 心情理解 野口さんの行動と気持ちの変化を捉えさせる。
	3 考え、議論する。【後段】(20分) 【中心発問】 野口さんは「意識をもち、行動に移すこと」がなぜ大切だと考えているのだろうか？ 【問い返し】(議論) ①「みんなが意識して、行動することで、物事を変えることができると思うのに、なぜ、10年後になくなってほしいものは変えられないと思うのか。 ②「みんな」の中に君たちは含まれないのですか？	(個人で3分考え、全体で共有) ※一人一人の意識と行動が物事を変える力になることを捉えさせる。 ○意識を持つことで、行動が続けられるから。 ○大勢の人が、意識して行動することで、大きな力になるから。 ○考えがあっても、行動しなければ、何も変わらないから意味がない。 C: 自分の意識を持たないと、長く続かない。 ※「みんな」の中には自分も含まれているという意識を持たせることで、社会連帯を自覚させたい。また、これまでの自然愛護や平和の実現に関して、自分事として捉え、社会形成者の一人であるという自覚を持たせ、行動しようとする意欲を高めたい。	机間指導中、個別の声かけ  T: (問い返し) 意識しなくても行動はできるよね？ 道徳的価値 社会連帯の自覚を深め、実際に関わってこうとする実践意欲を高める。
終末 10分	4 振り返り よりよい社会にするために自分ができることは何か考えよう。 ■OPPシートに記述	「みんな(社会連帯)」の中に自分も含まれるという気づきと自覚が記述されている。(自己の変容をメタ認知)	視点② 自己の学びをメタ認知しているか？

④ 板書

【振り返り】 コロナや差別などがなくなっただけじゃなく、なくならないと
思っているのは、自分がまだ「他人事」のように思っていて意識も行動もして
ないからだと思います。今まで「マスクをして」といわれるからしては、自分から「みんな
にうつさないようにしよう」と思わなかったのが、結局は自分で行動しただけ
でした。みんなのように意識して思ってもまだ行動しな人が、この世の中には多いので
問題を減らさないと思います。

1/9(水) 第30回 道徳(つながりが生み出す力)
教P.110～「富士山から変えていく」
10年後になくなってほしいもの
争い、戦争、格差、偏見、差別、ブラック企業、コロナ、ゴミ

「みんなが意識して行動したら…」(矢印)「みんな」の中に自分が入っていますか？という問い返して「はっとする」。

V 研究の結果と考察

研究の考察については、検証前・検証後のアンケート、OPP シート、授業観察等（写真やビデオ記録を活用）を基にして、単元を通した生徒の変容や学びの繋がり、道徳的価値の自覚の深まりを分析した。

1 単元型学習としての教材パッケージ化の実践

(1) 1時間完結授業における道徳的価値の自覚

教材のパッケージ化を実践するにあたり、1時間完結授業が「考え、議論する」授業であることを前提とした。それは、主題（その時間に生徒が何を学ぶのかを表したもの）を横断的に考えるために、1つ1つの価値について、発問や問い返し、他者との議論によって生徒が、自身の前理解に対する吟味を行う過程で、道徳的価値の自覚が必要となるからである。そこで、島（2020）の氷山モデル（図1）にある道徳的価値レベルに迫るため、教材の状況理解、登場人物の心情理解を丁寧に行い、発問や問い返しを工夫しながら「考え、議論する」授業を目指して実践を行った。

資料1は、第3時の授業後に記述した生徒Aの振り返りを示したものである。「先生の『みんな』の中に『自分』は入っているのか？という質問に関してはっきり『はい』と言えなかった自分がある」という記述から、問い返しによって、自己内省に至った過程が窺える。

【振り返り】
先生の「みんな」という言葉に「自分」は入っているのか？という質問に関してはっきり「はい」とは言えなかった自分がある事に少しおどろいた。この事から自分が気づいていない自分がもっといるんじゃないかと思えた。

生徒A

資料1 生徒Aの第3時の振り返り

資料2は、第2時の授業後に記述した生徒Bの振り返りを示したものである。「人間の問題が解決したら、平和と言えるのか？」という問い返しに対して、前時との関連を図った上で、再構成を行った様子が窺える。

【振り返り】
世界平和とは、人間だけの問題ではなく、動物たり、自然環境たり、地球そのものを理解したり、大切にしていくことが世界平和につながるんじゃないかと思いました。

生徒B

資料2 生徒Bの第2時の振り返り

資料3は、第2時の授業後に記述した生徒Cの振り返りを示したものである。対象学級における第2時の授業では、生徒の状況理解、心情理解が十分とは言えないまま授業を進行させたために、発問や問い返しによる自己内省へ、スムーズに授業を展開することができなかった。

【振り返り】
私は植物や動物が人間の力で殺されるのが平和だと思いません。また、先生の「世界中が平和になるのは無理」と言っていたのが納得できずした。

生徒C

資料3 生徒Cの第2時の振り返り

これは、「特別の教科 道徳」で、他教科と同様に授業づくりをしようとしたときに起こる課題であると感じた。他教科と同様にねらいを立て、目指す資質・能力の具体化を図ることは、これまでの道徳科の授業で懸念されたインカルケーションへ繋がる可能性があると考えた。そのため、生徒の実態に沿って、丁寧に1時間の授業を展開し、生徒自身が自然とねらいとする価値の理解や再構成を図る授業を目指すことが大切だと考える。

このような気づきから、ねらいとする価値について考える展開に授業を変更した。生徒Cは振り返りの中で「□さんの」と1主題について他者の意見から、自分の前理解に対する吟味を行っている。ところが、単元後のポスト記述において、3つの価値を統合する記述となっていた。

これらのことを踏まえ、教材のパッケージ化の実践には、まず「特別の教科」である道徳科の特性を十分に理解した上で、教材の状況理解、登場人物の心情理解を丁寧に行う必要がある。それを踏まえて、計画的・意図的発問や問い返しを行うことにより、「考え、議論する」深い学びの関連性や連続性と効果的に結びつき、生徒の自己内省から道徳的価値の自覚が深まるものと推察できる。

これらのことを踏まえ、教材のパッケージ化の実践には、まず「特別の教科」である道徳科の特性を十分に理解した上で、教材の状況理解、登場人物の心情理解を丁寧に行う必要がある。それを踏まえて、計画的・意図的発問や問い返しを行うことにより、「考え、議論する」深い学びの関連性や連続性と効果的に結びつき、生徒の自己内省から道徳的価値の自覚が深まるものと推察できる。

(2) 単元型学習としての教材パッケージ化の有効性

① 前理解の吟味と主題横断的価値の統合

教師の計画的・意図的発問や問い返しによって、前理解の吟味と価値の再構成を促す「考え、議論する」道徳科の授業が展開されることを前提に、本研究では、学びの繋がりを意識した単元学習による教材パッケージ化を行った。

図5は、OPP シートの記述内容における分類とその内訳を示したものである。単元学習にしたことで、複数の価値を統合する内容の記述が91%見られた。その内訳は、前時との関連を踏まえて価値の再構成に至った生徒が66%、前時との関連はなく1主題ごとの価値に対する再構成が行われた生徒が25%、価値理解に留まる生徒が9%いた。

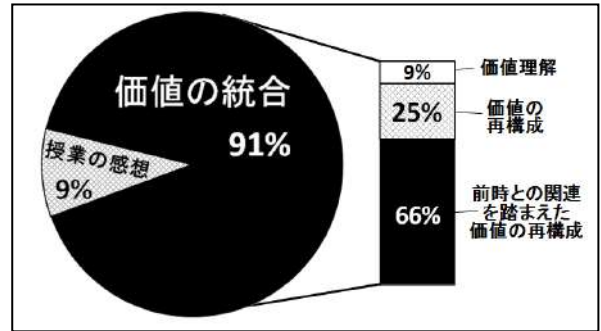


図5 OPP シートの記述内容とその内訳

図6は、道徳科の授業に関するアンケートの結果である。「前に学習したことと関連づけて、主題について考えている。」という設問に対して検証前後で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした生徒は、どちらも約80%と大きな変化はなかったが、検証後「そう思う」と実感を高めた生徒が、20ポイント増加している。

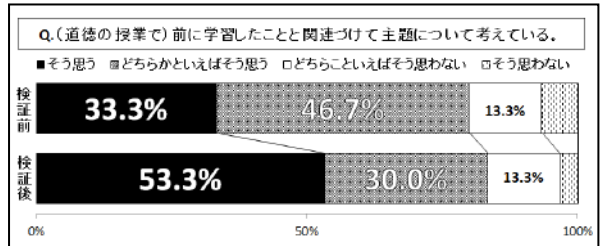
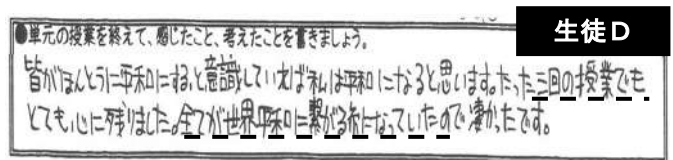


図6 道徳科の授業に関するアンケート①

資料4は、生徒Dの単元終了後の振り返りを示したものである。生徒Dの毎時間の振り返りからは、価値の再構成のみの記述だけであったが、単元を通して3時間を振り返った時「全てが世界平和に繋がる糸になっていた」ことに気づいた記述が見られる。つまり、毎時間の授業の中で、前時との関連を踏まえなくても、単元学習にすることで、生徒がこれまでの学びを繋げて考えたり、主題を横断的に捉えて、価値の統合を図ることができたと考えられる。



資料4 生徒Dの単元終了後の振り返り

これらのことから、道徳科の授業における単元型学習としての教材パッケージ化は、生徒が学びの繋がりを意識し、価値の関連性を実感しながら、よりよく生きるための見方・考え方を常に更新していく活動に繋がったことが推察できる。

② 道徳的価値の自覚を深める

赤堀(2017)は、「道徳的価値についての理解、道徳的価値を自分との関わりで考え、自己理解を深めること、道徳的価値を自分なりに発展させて自己の未来に夢や希望が持てるようにすること」が道徳的価値の自覚を深めることだと述べている。

図7は、道徳科の授業に関するアンケートの結果である。「毎時間の授業で、主題について自分の言動を振り返りながらよく考えている。」という設問に対して、検証前「そう思う」と回答した割合は39.1%だった。検証後は66.7%と27.6ポイントも増加し、自分との関わりで道徳的価値を考えていると実感した生徒が増えている。

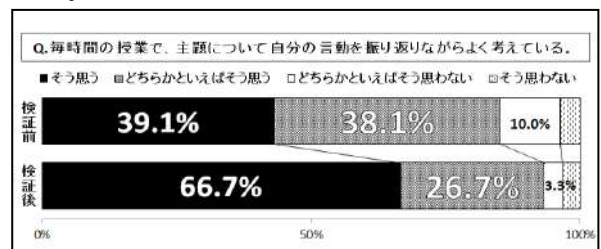
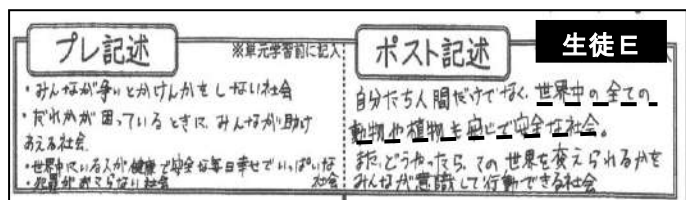


図7 道徳科の授業に関するアンケート②

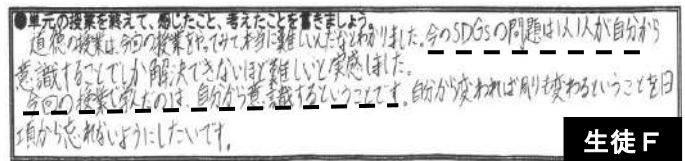
資料5は、生徒Eのプレ・ポスト記述である。ポスト記述には、プレ記述で見られなかった「世界中の全ての動物や植物も」という新たな視点を加えられている。また、価値の再構成だけでなく、目指す平和な社会に向けて、自分なりに発



資料5 生徒Eのプレ・ポスト記述

展させて行動意識を高めている様子がわかる記述が見られる。

資料6は、生徒Fの単元終了後の振り返りを示したものである。3つの価値を統合し、自分との関わりで考えて、道徳的価値を自分なりに発展させて考えた「平和な社会」を「SDGs」の問題解決だと捉え、自ら意識して行動しようとする実践意欲の高まりが窺える。

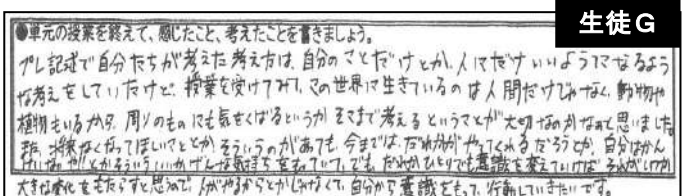


資料6 生徒Fの単元終了後の振り返り

このように、単元学習として教材をパッケージ化することで、生徒が道徳的価値について、自分事として再構成を繰り返し、自分なりに発展させて行動意欲を高める一助になったことから、道徳的価値の自覚を高めることができたと推察される。

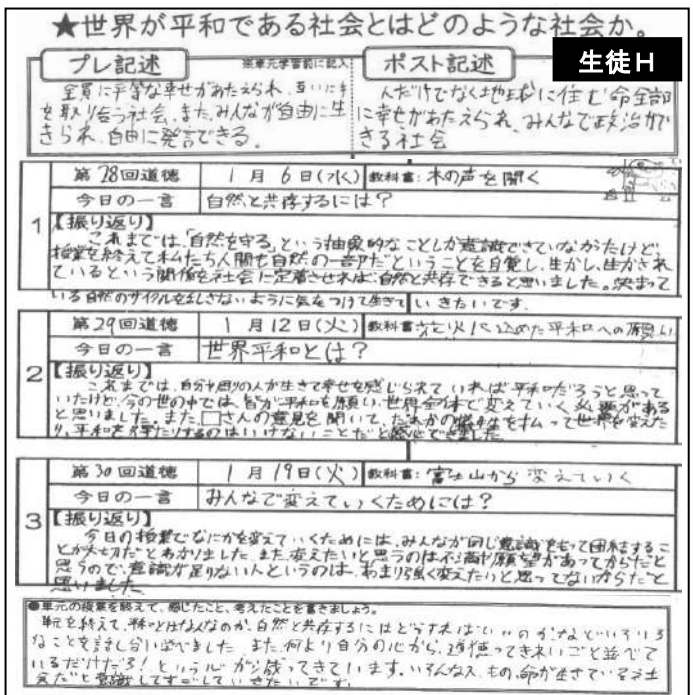
③ OPPAによるメタ認知

資料7は、生徒Gの単元後の振り返りを示したものである。プレ・ポスト記述、第1時から第3時までの自分の学びを振り返り、考え方の変容を実感している様子が窺える。プレ記述から「平和」に対する考え方が「自分のことだけ」という一面的な見方だったと振り返り、授業を重ねていく中で、再構成した考え方をまとめている。また、「平和な社会」は人任せではなく、自分から意識を持って行動しようという実践意欲が記述されている。



資料7 生徒Gの単元終了後の振り返り

資料8は、生徒HのOPPシートの一部である。1時間完結授業の振り返りの中では、価値を統合するところまでは至っていないが、毎時間、これまでの自分の考え方と授業後の変容を記述していることから、道徳的価値の前理解に対する「正しさ」の吟味が行われている。また、OPPシートにしたことで、3つの価値を統合しているポスト記述が見られる。



資料8 生徒HのOPPシート（一部抜粋）

これらのことから、単元学習型の教材パッケージ化授業において、OPPシートによる振り返りは、生徒がこれまでの学びを視覚的に見ることによってメタ認知を促し、学びの関連性や連続性に気づき、自己内省しながら価値の再構成や統合を繰り返す活動を経て道徳的価値の自覚を深める一助になるものと推察される。

2 検証授業のまとめ（本研究を实践する上で、気づき、実感したこと）

(1) 1時間完結授業の充実

単元を貫く問いを立て、教材をパッケージ化し、1時間の学びを繋げ、何度も価値の再構成を図る機会を作ることで、道徳的価値の自覚を深めることができると考え、実践を行った。

しかし、「特別の教科 道徳」という教科の特性から、他教科のように明確に目指す資質・能力が示されていない道徳科の授業は、道徳教育の要として位置づけられているため、1時間の授業が果たす役割がとても重要であると再認識した。まずは、1時間の授業を充実させることが、パッケージ化をより有効に生かすことができる土台であると考えられる。

(2) 教師が道徳的価値の繋がりを意識する

道徳的価値の繋がりを意識することは、複数の価値が重層的に絡み合っている「道徳性」を養うために必要な視点であると考えている。生徒はこれまで、1時間の授業で現時点での納得解を求めると満足し、学びを完結したものとして捉えてしまう傾向にあった。そのため、次時の学習に繋がりを見出すことは少なかった。

検証授業を終えて、この課題は授業を作る教師側の意識の問題ではないかと考える。教師が授業づくりの視点として教材や道徳的価値の繋がりを意識することで、生徒が自然と複数の道徳的諸価値との繋がりに気づき、他者との協働によって納得解を更新していくきっかけになるものと考えている。

(3) 道徳のねらいは緩やかに捉えること

単元型教材パッケージの授業を行うにあたり、他教科と同様に「ねらい」をどのように設定するのかという課題が挙げられる。今回の検証では、他教科同様に指導案を作成し、単元のねらいと1時間ごとのねらいを設定し、授業を行った。

しかし、道徳的価値の繋がりを意識する余り、教師側の意図する答えを、生徒から引き出したいと思う場面があった。このように、他教科と同様の視点で明確にねらいを掲げてしまうと、これまでの道徳の授業で懸念されていたインカレーションに繋がる可能性があると感じた。この解決のためには、まず(1)で前述したように、道徳科の特性理解が必須である。そして、道徳科のねらいをもっと緩やかなものとして、教師側が認識しておく必要があると感じた。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 「考え、議論する」授業づくりを目指し、意図的・計画的な発問構成や問い返しを工夫することで、多様な意見に触れながらこれまでの納得解（前理解）に対する「正しさ」の吟味が行われ、生徒の道徳的価値の理解を深めることができた。
- (2) 単元学習として教材をパッケージ化することで、生徒が道徳的価値の繋がりを意識し、学びを止めることなく、継続してより高次の納得解を求めるようになった。
- (3) OPPシートを活用することで、生徒がこれまでの学びを振り返りながら自己の見方・考え方の変容や広がりメタ認知し、自己理解を深めたことで、道徳的価値の自覚を深めることができた。

2 今後の課題

- (1) 本研究を実施するにあたり、学校全体で道徳科の年間指導計画やカリキュラムの見直しが必要だと感じた。年間を通して計画的に教材をパッケージ化することで、効果的に道徳的価値の自覚が深まることができると考える。
- (2) 「特別の教科」である道徳科の授業では、他教科と異なり、明確に目指す資質・能力が示されていないことを踏まえ、教師が緩やかにねらいを持ち、臨機応変に授業を展開させていくことが大切だと感じた。まずは、授業づくりの段階で複数の発問や問い返しを準備する必要があると考える。

〈主な参考文献〉

- 汐見稔幸・奈須正裕 監修 上地完治 編
『アクティベート教育学⑨道徳教育の理論と実践』 ミネルヴァ書房 2020年
- 島 恒生 著 『小学校・中学校 納得と発見のある道徳科「深い学び」をつくる内容項目ポイント』
日本文教出版 2020年
- 堀 哲夫 著 『新訂 一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』
東洋館出版社 2019年
- 文部科学省 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』
教育出版 2018年
- 赤堀博行 著 『「特別の教科 道徳」で大切なこと』 東洋館出版社 2017年